第5・6回
新 UD 出前講座のシナリオやプログラムを考える

（1）プログラム

日　時｜12 月 12 日（日）　10：00 ～ 16：00

会　場｜江東区文化センター 5 階　第 6・7・8 会議室

内　容｜新 UD 出前講座のシナリオやプログラムを考える

・新 UD 出前講座のコンセプトを伝えるには、どんなシーンがあるかを各グループで出しあいました。

・伝える手法としては寸劇に限らず、どんなやり方があるかも意見交換しました。

タイムテーブル｜

10：00（05 分）　あいさつ
10：05（30 分）　本日のプログラム、前回の振り返り
　　新 UD 出前講座の構成案
10：35（60 分）　●全体で意見交換
・構成案について
・各グループのアイデアへの意見交換
11：35（10 分）　～休憩～
11：45（45 分）●グループワーク 1| 前回のグループに分かれて、
　　シナリオやワークショップのアイデアを考えよう！
12：30（60 分）～昼　食～
13：30（30 分）　●発表（途中経過）
　　・発表準備 5 分
　　・3 分× 5G ＝ 15 分　＋質疑応答 10 分
14：00（60 分）　●グループワーク 2| さらに深めよう！
15：00（10 分）　～休憩～
15：10（40 分）　●発表
　　・発表準備 5 分
　　・5 分× 5G ＝ 25 分　＋　質疑応答 (10 分)
15：50（10 分）　次回の進め方、まとめ、事務連絡、アンケート記入
16：00　　終了

（2）新 UD 出前講座　プログラム構成案

A　読み聞かせ（パワポ等で説明）と寸劇

1　あいさつ（5 分）
2　絵本読み聞かせ（候補「みえるとかみえないとか」）あるいはパワポ等で説明（20 分）
3　問いかけ｜「自分の当たり前と、他の人の当たり前」（15 分）
　・絵本を読んで、どんなことを感じたかな？（感想を聞く）
　・「立場が違う人と出会った時、自分の当たり前と、他の人の当たり前が違うことがあるよ」について考えてみよう。
4　寸劇（40 分= 20 分× 2　その時々で 1 つ 20 分の寸劇 2 つを選択）
　寸劇の構成
　●寸劇を見せる｜良くない例
　●意見交換　　｜目的は同じ、やり方が違う
　●寸劇を見せる｜改善した例
　●体験　　｜子どもがどれかの役を演じてみる
5　まとめ（10 分）

B　ワークショップ

1　あいさつ（5 分）
2　UD のお話（10 分）「自分の当たり前と、他の人の当たり前」
3　問いかけ　サイン板の見え方のいろいろ（20 分）→お話あるいは寸劇など
　・人による見え方の違い、こんな工夫があるといいを伝える。
3　「ユニバーサルなサイン板を考えよう！」（30 分）
　・ハード整備やデザインのアイデア
　・まわりにいる人の対応
4　発表（20 分）
5　まとめ (05 分)

（３）グループワーク｜新 UD 出前講座のアイデア出し

５つのグループに分かれて話し合った内容の一部を掲載します。

１グループ

●それぞれの当たり前

・常に同じ言葉を使って言われるので、マニュアルがあるのではないかと思う。「どこまで乗るか？」と聞かれると「余計なお世話」と思う。

・「見えていないからわからないよね」という気持ちが透けて見える。黙ってついてこられる怖さが、見えている人にはわからない。

→これらは「尊厳」にもつながること。

・「見守っていますね」とひとことあれば良い。これはコミュニケーションの問題。

・ただ純粋に「心配だ」という思いなのか？ついてくるということで、責任逃れをしているように感じる。

→両方（両面）から考えてみる必要がある。

・「おおきなお世話」と「ゆずりたい、助けたい」人の対話が必要。これが相互理解につながる。相互理解によって、断る場合でも言い方が変わるはず。「慣れてますから大丈夫です」など。

●相手の気持ちを考える

・ジャンケンで席をゆずることの何が問題か？ゆずられる側がそれを見てどう思うか、まで考えられていない。席をゆずるのはマイナスの行為のように感じてしまった。ゆずるということが、特別なこと（良いこと）と思うと周りの目が気になるのではないか。

・息子が席をゆずったことに対して「いいかっこするんじゃないよ」という親がいたという寸劇をやったが、席をゆずることは本当に「いい格好」なのか？

２グループ

●子どもが我が事として考えられる設定

・小学校は、集団で行動することが多い。

→子どもが自由にルールを設定できるシチュエーションを設定する。

１）昼休みの遊び間、みんなが好きな遊びが苦手な子ども（例：ドッジボールが嫌い、みんなはやりたい）。

→心臓が悪い子どもは走れないので、鬼ごっこだとすぐにつかまる（鬼になったら他の人を捕まえられない）。かくれんぼだと、隠れているだけなので他の子どもと同じように遊べる。

→みんなが好きな遊びというテーマ。みんなと遊びたい、遊びの選択権は子どもにある。

２）ほとんどの子どもが好きな食べ物を嫌いな子どもがいる。

→すいかが嫌いな子どもがいた。みんなで海に行きすいか割りをする。スイカ割りはしたいが、スイカは食べたくない。

→カレーが嫌いな子どもを設定する。

・ある大人（PTA の人など）が「今日はカレーにするぞ」と宣言する（強制的な状況）

・まわりの子どもが喜ぶ（同調）

・カレー嫌いな子どもが困る／言い出せない

→好き嫌いよりもアレルギーの方がわかりやすい。

→嫌いなものを食べなくて良いということは学校で教えにくいのでは？／学校の教育方針とテーマ・内容が合っていないのでは？

→強制する役がいることで問題がはっきりする。子どもだけの話よりも、大人が同調を誘導する形がわかりやすい。

３グループ

●「声で話す人」「手話で話す人」のそれぞれの当たり前

・５人は声のおしゃべりで盛り上がる。１人、聞こえない人がいる。様子がわからない、何を話しているんだろう？　疎外されている人の気持ち、孤独感。

→ランチに行くと言っても、一緒に行って大丈夫かな？迷惑かけないかなと心配。

→声で話していると、話についていけない。食物アレルギーがあるから自分で食べ物を選びたいが、一緒に行動するとみんなにしたがわないといけないかなと不安がある。

→細かい状況がわからないと、はっきり断れずについて行き、しまった！と思うかも。

→聞こえない人がいてうなずいているだけれど、わかっているかな～という感じになるかも。

・状況が入れ替わる。５人が手話のおしゃべりで盛り上がる。１人、手話ができない人がいる。

→語学ができない状態で海外に行くと、疎外感がある。

→海外に行った時､その国の言語で「ありがとう」「水をください」は覚えていく。それが出来るとコミュニケーションが断然深まることを実感していた。

→区の窓口で聴覚障害者の対応をすることがある。手話通訳者を介して会話をするが、最後は手話で「ありがとう」と表現する。

●寸劇の設定アイデア

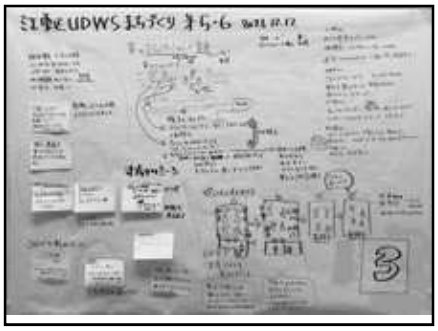
・タクシーに乗ろうとしている時、行き先を紙に書いて運転手に渡したら、わかりやすいためいきを吐かれた。いつもこのような経験をしている。

→女性もあるある体験。

・慣れているお店と、行ったことがないお店では、コミュニケーションが違う。どこでも安心して買い物ができるようになることを望んでいる。

・お店で、いろんな立場の人が買い物をすることについて考える。視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者、高齢者、ベビーカー、子ども、外国人など。

→障害も重さによって違う。老人も元気な人と、そうでもない人がいる。聞こえずらい人も増えている。



４グループ

●自分の考えで行動する重要性

・障害者にはやさしくという考えではなく、自分のこととして考えてほしい。

・誰でも助け合える。敷居を低くして行動に移しやすくしたい。気負わず自然に取り組めるように。

・困っている人を助けると、お互い気持ちがいいと言うことを伝えたい。助けたいという気持ちは大切にしたいが、助けることに特別な価値を加えない方が良い。

・大人が正解を押しつけるのではなく、自分が決めることが大切。

・寸劇ですべてを伝えるより話題提供や考えるきっかけとする。その後は子どもに考えてもらう。

●ロールプレイで経験を積む

・いくつかパターンを準備し、ロールプレイをしながら、子どもが実際リアルな場面に遭遇したらやってみようと実践につなげられるようにしたい。

・席を譲って断られても OK な経験ができると良い。

・コミュニケーションの練習ができると良い。

・子どもが考えた寸劇のつづきのセリフのやり取りは、みんなの前で発表するより、グループの中で話し合うことで、いろいろ意見の違いを知ったりすることを大切にしたい。

・内容（パターン集）

１）荷物が大きく（多く）て、座ると置き場に困るので、立っていたが譲られた。

2）座っている男子小学生の前に 75 歳ぐらいのおじいさんがいる。
小学生：元気に「どうぞ」と立つ。
おじいさん：「座ったら立つ時つらいから、良いよ。ありがとう」
小学生：にこり
3）小学生の前に大きなカートを押しているおばあさん。手押し車を前に右往左往。
4）優先席でないところ座っていたら、前に杖の人が立った。
5）足腰のために立っていたかったので、普通の席の前の吊革につかまっていたら席を譲られた。
6）席を譲ったら「荷物を持つわよ」としきりに言われた。どうする？
7）譲ろうとしたのに断られたとき、お互い気持ちよく終わるパターンとその逆パターン。

5 グループ

●他グループからの意見

・サイン板は全盲者の出番がないし、聴覚障害でみている人も関わりにくいのではないか。
・自分ごとになるよう、子ども目線・視点が必要。例えば通学路の途中にあるサインや音を見つける。
・子どもたちに見やすさ・使いやすさを考えてもらう。色々な人の立場でわかりやすいサイン板を示すため、例えばクイズ（三択）はどうか。
・サイン「板」ではなく、サイン「システム」（サインのあり方）を考える WS ではないか。
・例えば玄関から図書館まで案内するという設定はどうか。（色々な案内の仕方を子どもが考える。）

●サイン板（多様性）について

・サイン板とは？学校案内図、地域図、電車の構内図、英語版、他に何があるか？
・小学 4・5 年生にとって身近なサイン板とは何か？
・どんなサイン板をつくる？ある程度設定を決めることが必要。また、どうやって周りの人（見えづらい人、聞こえづらい人、話を最後まで聞きづらい人、文字が見づらい人など）に関わってもらうか。
・どのような人に対応したサイン板が良いのか。例えば、外国人（文字に頼らないで理解できるサイン板）。
・多様な人（外国人、視覚・聴覚障害者、内部障害、LGBT、車いす使用者、妊婦、高齢者など）がいるということをどう認識すればいいか。自分が怪我をした時の想像ができるか。
・サイン板の作成は Google Chrome を使うとアイテムはいらないのではないか。
・発表は作成したサイン板を使って道案内をするというのはどうか。